

【一般演題】

クリニックにおける内視鏡室の良好な環境と効率的な業務について

のぞき消化器IBDクリニック

医 師 野崎 良一

内視鏡技師 ○松平美貴子、西坂 好昭

【はじめに】

2021年9月1日に開業した消化器疾患・炎症性腸疾患（IBD）を専門とするクリニックで勤務している。内視鏡技師の2人は開業の数年前から携わり、クリニックのレイアウトの考案、設計士との打ち合わせなど、理想的なクリニック構築に向けて院長とともに取り組んだ。

今回は、クリニックにおける内視鏡室の環境と業務について、内視鏡技師の取り組みと工夫およびその成果について報告する。

【方法：内視鏡技師の取り組みと工夫】

- ① 医療従事者と患者が交差しない導線の構築
- ② 使用后・消毒後の内視鏡運用、備品の感染対策
- ③ 吸引物による臭気に対する消臭対策
- ④ 業務の効率化

【結果】

- ① 患者は、受付から前処置室・トイレ、内視鏡室、安静室、更衣、待合室まで時計回転の導線になっており、患者同士も交差することがない。医療従事者はバックヤードを設けることにより患者導線と区別できている。
- ② 洗浄室を一方通行とし、使用後の内視鏡搬入口と洗浄消毒後の搬出口を分けた。また、汚染シンクと清潔シンクを設け、シンクの大きさ・深さを指定した。使用する備品や処置具は全てディスプレイ製品を使用している。
- ③ 内視鏡室の隅に吸引庫を設け、吸引器を常備した。吸引物を溜める本来の吸引器から延長チューブをのばし吸引庫内の吸引器へ接続。臭気はここに吸引され天井へ換気できるような構造とした。その結果、内視鏡室内で吸引物の匂いのしない快適な環境が提供できている。
- ④ 内視鏡室・安静室・点滴室などの全部屋が常にモニタリングできるように、中央のナースセンターにモニターを設置している。検査の進行状況や患者の状態が観察できる。さらに、看護師は全員インカムを装着している。離れていてもインカムで連絡が取りあえるため、指示や情報の伝達、業務依頼、応援依頼がリアルタイムに行える。患者の安全確保および業務の効率化につながった。

【結論】

クリニック開業に向けて、内視鏡技師がこれまでの経験を活かし、レイアウトの構築、設計士との打ち合わせなどに携わってきたことにより、理想的な内視鏡室の環境と業務の運用が実現できたと思われる。これまで問題なく遂行でき、開業1年を迎えることができた。クリニックの小規模な空間においても最大限の工夫をすることにより、安全かつ安楽なケアの提供につながった。